



支援の現場を訪れて

広谷 美咲

途上国支援が偽善や自己満足になっていないか。これは、私がボランティア活動をする上で抱き、エッセイでも提起した視点だ。今回、フィリピンで支援の現場を訪れたとき、私の中で「真の支援とは何か？」という問いに答えるためのヒントとなるものが3つ見つかった。

まず、「継続性」だ。日本の NPO アイキャンで育った元ストリートチルドレンの青少年たちが、自らが立ち上げから関わる団体キャリアで、次世代に対する活動をしている姿を見た。非営利の支援活動は資金不足などで長期的な継続が難しいことも多い。だが、支援を受けた人々が次の世代にその意志を繋げることで、継続的な支援が可能になるのだと学んだ。

次に、「対話のための語学力」である。アイキャンの職員の方は、タガログ語を流暢に話しながら、子供たちとコミュニケーションを取っていた。一方で私は、英語を喋らない彼らとコミュニケーションをとることに苦勞した。真の支援には、被支援者のニーズを汲み取り、彼らの心に寄り添うことが必要だ。彼らの言語を話してこそ、初めて相手が本当に求めているものに気づけるのだと痛感した。

最後に、「多様な支援の形」だ。大規模な河川工事のプロジェクトや、草の根外交官としての JICA 協力隊の活動、それぞれに意味があり、それぞれの支援の形が存在することを知った。真の支援は一つの形に縛られるのではなく、相手に寄り添い、多様な手段と目的を持って行われるべきなのだ。